

「居住地が遠い家族に対する支援：今日の赤ちゃん」

Support to family with far residence ground: Transmission of baby's image

信州大学医学部附属病院西4階 NICU

南原聡美 城井三奈 下村陽子

## 要旨

NICU のファミリーケア充実の一貫として、居住地が遠く「共にいる時間」をなかなか作れない家族に対し「今日の赤ちゃん」という携帯電話の画像送信システムを使ったサービスを運用しはじめた。母子分離の状況を和らげ親子の関係構築が進むことなどの期待がもたれた。利用家族にインタビューを行ない、肯定的な返答を得た。しかし利用家族はまだ少なく、その理由として料金がかかること、システムが十分確立していないことなどが考えられ、改善の必要がある。

キーワード：ファミリーケア、携帯電話画像送信、親子の関係構築

## 緒言

昨今、高度医療の集中化、母体や胎児の異常の早期発見、救命出来る超低出生体重児の増加などにより、当院NICUも、たくさんの新生児を迎えてきた。そして、より高度な技術と質の高いケアを提供すべく、日々努力を重ねている。

今回は、近年の信州大学NICUの入院数、ファミリーの居住地を背景に、低出生体重児と親の関係性発達の観点から、新たなファミリーケアを考察した。

## 1、方法

### 聞き取り調査

調査期間：2006年10月～12月

対象：低出生体重児の家族、当NICUスタッフ

聞き取り方法：面談にて2家族（患児入院中）

電話にて4家族（患児退院後）

面談にて当NICUスタッフ8名

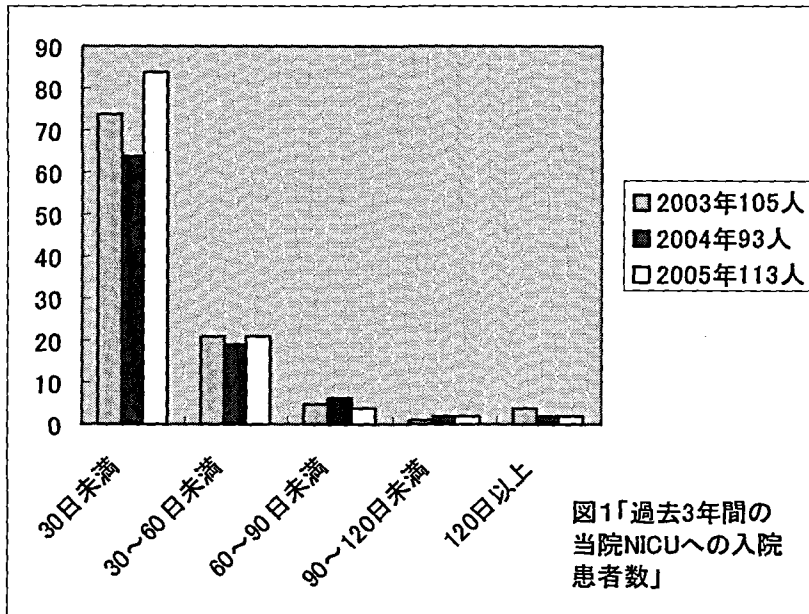
### 〔倫理的配慮〕

この聞き取り調査に際し協力の有無に関わらず不利益のないこと、聞き取り内容は個人が特定されないよう使用させていただくことをご家族に了承を得ており、発表、論文掲載に際し看護研究倫理委員会の承認を得ている。

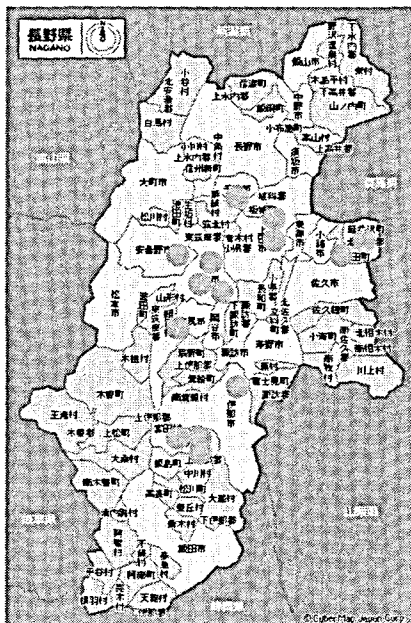
## II、当NICUの実際

過去3年間の当院NICUへ入院患者数は年平均104人、1ヶ月以上の長期入院患者数は年平均30人で約35%だった(図1)。

図1



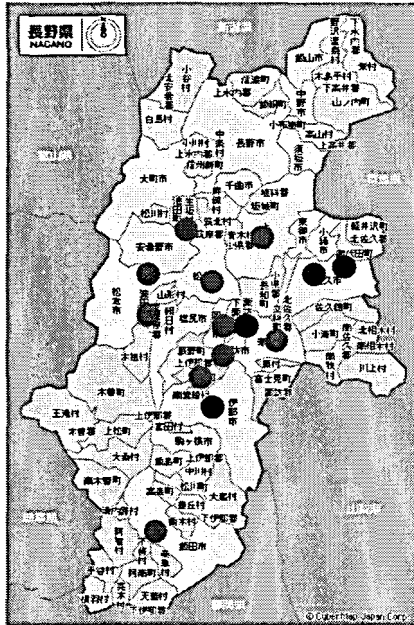
当院産科への母体搬送は長野県全域から行なわれており、生まれてくる新生児の家族は県下全域にわたっている(図2、3)。長期入院となる場合も多く、母の退院後の面会は1週間に1回ということも少なくない。



当院NICUにおける  
2003年～2005年の  
長期入院患者の居住地

60日～90日未満 ●

図2「過去3年間の長期入院患者の居住地①」



## 当院NICUにおける 2003～2005年の 長期入院患者の居住地

90日～120日未満●  
120日以上●

図3 「過去3年間の長期入院患者の居住地②」

低出生体重児を生んだ親と子の関係構築には様々な困難がある。例えば、親にとって予想外の状況、見慣れぬわが子の姿、行なわれる高度で難解な集中治療、将来への不安、などである。その中でも居住地が遠いことによる面会の少なさは母子分離の要因にもなり、親子関係の発達を阻害する大きな因子となっていると思われる。

### <当院NICUで行なってきたファミリーケア>

- ・プレネイタルビジット (児が生まれる前に担当予定の看護師と医師が挨拶、父母の気持ちを聞く、予測される児の状態の説明、NICUの紹介、見学)
- ・母の入院中の面会は24時間可能
- ・面会がない時のスタッフによる使い捨てカメラでの写真撮影
- ・面会ノート (日々の児の様子や児への思いなどを綴る両親とスタッフの交換日記)
- ・電話をかけてもらい本日の児の様子を報告 (24時間対応)
- ・母の退院後、面会時の駐車料金は免除
- ・ミルクの胃注入や母乳の綿棒での口腔内塗布、ボトル授乳、早期からの直接母乳、おむつ交換、沐浴など父母のケアへの参加
- ・カンガルーケア (低体温になりやすく保育器から出せない低出生体重児を父母が肌と肌で直接あたためながら抱っこする。愛着形成や神経学的発達にもよい効果があると言われている)
- ・退院前の母児同室

- ・退院時、色紙などにコメントを寄せ書きして贈る

現在それらのケアをご家族に紹介するファミリーケアパスを配布し始めた。

今回、ファミリーケアの一貫として新たに、居住地が遠く「共にいる時間」をなかなか作れない家族に対し、「今日の赤ちゃん」という携帯電話の画像送信システムを2006年6月より試験運用、8月より本格運用しはじめた。

<システム導入にあたり、期待したメリット>

- ・活き活きと動く児の映像をタイムリーにみることで、母子分離の状況を和らげる
- ・わが子の存在を身近に感じ、親子の関係構築が進む
- ・それをきっかけとして面会の頻度が増えるというポジティブフィードバックが起こる
- ・児の状況を知らせることで不安を軽減させる
- ・親がいない時に起こったことを共有、記念として記録できる
- ・祖父母や兄弟に見せることで家族全体に受け入れ態勢ができる

Ⅲ、結果

- ①「低出生体重児と親における関係性の発達モデル」(表1)を参考に当院NICUに入院している児の母への聞き取り

表1「低出生体重児と親における関係性の発達モデル」(1)

	STAGE 0	STAGE 1	STAGE 2	STAGE 3	STAGE 4	STAGE 5
関係性の特徴(親の児についての認知・解釈)	胎内からの連続性をもったわが子という実感が無い	「生きている」存在であることに気づく	「反応しうる」存在であることに気づく	反応に意味を読み取る 肯定的-否定的	「相互交流しうる」存在であることに気づく	互恵的(reciprocal)な相互交流の積み重ね
親のコメント	「これが私の赤ちゃん？」 「本当に生きられるのだろうか」 「見ているのがつらい、怖い」 「腫れ物に触れるよう」 「将来どうなるのだろうか」 「かわいいとは思えない」 「これで人間になるのだろうか」 「夢であつたらいいのに」	「生きていると思えた」 「頑張っているんだ」	「OOちゃん」 (そつと名を呼ぶ) 「お目目開けて」 「目が合う」 「側に立つと目を開ける」 「顔をしかめる」 「足を触れると動かす」	「呼ぶとこちらを見る」 「帰ろうとすると、泣く」 「手を振り返す」 「触ると、嫌がる」 「目を合わせようとする、視線を避ける」	「本当に目が合う」 「泣いても、私が抱くと、泣きやむ」 「上手におっぱいを吸ってくれた」 「吸ってくれとおっぱいが張る」 「眠ってくれないと、帰れない」	「顔を見て笑うようになった」 「お話をするんです」 (クレーイング)
親の行動	接触 触れることができない 声かけ 無言 注視 遠くから“眺める”	促されて触れる 指先で四肢をつつく (涙)	指先で四肢を撫でる 呼びかけ そつと静かな声	掌で拳銃を撫でる 頬、口の周りをにつつく 一方的な語りかけ 成人との会話の口調 児の表情を読み取ろうとする	掌で頭をぐるりと撫でる 接触に抵抗がない 対話の間をもつ語りかけ 高いピッチ	くすぐる 遊びの要素を持った接触 マッサージ (母親語)

<STAGE 0>

- 「こんなはずじゃなかった」
- 「自分の子だけどかわいさの実感が無い」
- 「宇宙人みたい」
- 「本当に私の子なのか」
- 「イメージと違う」

「抱っこができない」

「あまりの小ささ、弱々しさに大きくなるイメージが湧かない」

「自分の気持ちがついていけない」

「顔が覚えられない」

「そのように思ってしまう自分は母として失格なのではないか」

<STAGE1~2>

児に触れ、母乳を搾り、ミルクの胃注入などのケアに参加するうちに児に話しかけるようになる。

<STAGE3 以上>

「一番うれしかった」

「あったかくて気持ちいい」

「かわいくてしょうがない」

「早く退院して一緒に過ごしたい」

②「今日の赤ちゃん」を試験運用期間に利用された家族の感想

「自分が撮れない場面や様子が写っていて良かった」

「自分がいけない時の状態がわかって、安心につながった」

「何回も見れることは楽しみだった」

「祖父母や兄弟にすぐ見せることができた」

「毎日面会に来ているから必要ないと思っていたけど、届いてみたらすごくうれしかった」

「届かなかったと思う、見ていないからわからない」

「面会と面会のちょうど真ん中になる日にちに送ってほしい」

「眠っているだけだと音声が入らず寂しい」

「今日の児の体重や様子などをコメントや音声での説明を入れてほしい」

「何もなくても毎日送ってほしい」

「親によって考えはいろいろ違うと思うから、いつごろどんな時にどんな画像がほしいか個別に対応してもらえるといい」

「画像を他の携帯電話やパソコン、DVDに転送できるようにしてほしい」

「スタッフが使い捨てカメラで撮るものや面会時の写真やビデオで十分だと思った」

「安いとは思いますが料金がかかるから」

「3ヶ月の料金となると高いと思う」(静止画 28 円、動画 268 円)

「出生直後は、あまりに小さく痛々しいわが子の姿を撮影すること写真に残すことにも葛藤した」

「自分は毎日面会にこれるから必要ない」

「あまり面会にこれない人にとってはいいシステムだと思う」

### ③当院NICUスタッフにこれからの課題を聞き取り

- ・システムが十分確立していない

例えば、全家族に紹介するのか、遠隔居住地の家族だけに紹介するのか

誰がいつどのように説明、撮影、送信するか

どんな目的でどのようなものをどのくらいの頻度送るかなど、家族の要望の聞き方

コメントや音声をどのように活用するか

撮影送信の記録をどのように残すか

送れなかった時の対応

送った後その感想を聞いていく必要性（家族の要望に沿ったものだったか、目的に対する評価、料金に見合ったケアであるかの評価）

- ・スタッフに「今日の赤ちゃん」のシステム自体がまだ十分浸透していない
- ・個別対応していくと日々の業務にうまく組み込めず、やり忘れが起こりそうである
- ・携帯電話の操作が難しく、誤送信などしてしまいそうで積極的に行なう気になれない
- ・料金や目的に見合ったものが送れるか自信がない

## IV、考察

新たに導入した「今日の赤ちゃん」はまだ症例数も少なく、実際の利用家族は、試験運用時4家族、本格運用時2家族（12月末現在）と少数である。今回の調査により、当初、私達が考えていたメリットが裏付けられたが、要望や改善点が利用家族、スタッフ両方からよせられ、積極的に利用されない理由も明確になった。家族側の理由としては、料金がかかる、このシステムの有効性を十分理解していない（スタッフの説明不足も含めて）、まだ愛着形成ができていない、小さく痛々しいわが子の写真を撮ること、残すことに葛藤している、他のケアで満足している（使い捨てカメラによる写真撮影など）である。それらを考慮し、スタッフ側の課題も含め、改善していくことで、これからのファミリーケアにおいておおいに活躍するシステムとなるだろうと考える。やむなく母子分離されてしまう家族に対して、大きな支援となる。

少しでも赤ちゃんの存在を身近に感じてもらえるよう工夫し、努力することはNICUナースの役割である。これからも検討を重ね、さらにより良く使っていきたいと考える。

## 結語

今日の赤ちゃんシステムはファミリーケアの充実に有用である。

#### 引用文献

- 1) 橋本洋子：NICU ところのケア、PP114～115、メディカ出版、2000

#### 参考文献

- 1) 橋本洋子：NICU ところのケア、PP114～115・108～119、メディカ出版、2000
- 2) 堀内勁、他：カンガルーケア、PP11～14、メディカ出版、1999
- 3) 仁志田博司：未熟児看護の知識と実際、PP156～157、メディカ出版、1989